人が繋がり可能性が広がる故郷へ

糸が繋げる人と地域

現在、鶴沢地区にあるアトリエで「ラニット」デザイナーとして様々な分野で活動する高橋彩水（あやみ）さん。服作りとともに人と地域の繋がりを創る活動もしています。

東日本大震災で感じた人と人との繋がりの大切さ

都内のアパレルで働いていたという高橋彩水さんが、川俣町で活動を始めたきっかけは東日本大震災だったと言います。「学生時代にファンシーヤーン（飾り糸）に出会い、糸を使った職業に就きたいと思っていましたが、コンセプトが決まらず数年間悩んでいました。しかし、東日本大震災が起こり、地元から人が減り、気持ちまでもが離れ離れになる現実を目の当たりにして〝人と人との繋がり〟を強く意識するようになりました」と高橋さんは当時を振り返ります。

その後、高橋さんは、糸やニットを通して人と人との繋がりができるブランド、福島だけではなく都内でも通用するブランドを作り、川俣町を人の集まる場所にしたいと考えました。

◁高橋さんが作るファンシーヤーンは数種類。ファンシーヤーンもニットもアトリエの機械と手作業で作られている。

1. ファンシーヤーン（飾り糸）を使ったピアス /2. 道ゆく人に突然声をかけ、ニットを着てもらうコラボレーションプロジェクトで制作したゲリラフォトシューティング写真集 /3. フィリピンにあるラニット村で行ったワークショップの様子

ものづくりとコミュニティづくり

川俣町でブランドを立ち上げた平成27年、山木屋地区のNPO法人「お気軽ネットワーク」から「町外から若者が参加してくれるような企画を考えてサポートして欲しい」という話が高橋さんのもとへ舞い込んできました。「震災後、環境の変化、高齢化によりストレスを感じたり孤立する話を多く聞きました。また、地方では産業でも都心の企業の企画を請負うことが多く、共倒れすることが多々あります」と話す高橋さん。そこで、高橋さんは、持続可能な仕組みづくりを外部と連携できる様、外に開けたものにすることが大切だと考え、地域交流会「ペーニャ」（下部参照）の開催を提案しました。高橋さんは「ものづくりもコミュニティづくりも苦労の連続ですが、人との繋がりを大切に、関わる多くの人の意見を取り入れて柔軟に変化させていきたいと思います」とものづくりと地域の未来について考えます。

人と糸と繋がりが生まれるまちへ

現在、多くの雑誌やテレビなどで服を提供する一方、ペルーの大使館や企業と行う「アルパカニットショップ」づくりのアドバイザーや福島県のロボット製作会社とのコラボ商品づくり、国立大学との素材開発に技術者として関わるなど活動の幅を広げる高橋さん。様々な人達と関わる中であることに気付いたと言います。「服作りで使う糸は、様々な特徴の糸があります。重さ、長さ、細さ、伸縮性。それらが集まって一つの服になる。その可能性は糸の数だけ広がっています。それはこの町にも当てはまると思ったんです。人の数だけ個性があって、その人たちが集まる町は、可能性が無限大に広がる魅力的な町になる。だから、服作りを通してこれからも多くの方と繋がり、向き合い、川俣町を色んな個性を持った人たちが対話できる、繋がりを持てる場所にしていきたいと思っています」と今後の目標を力強く話してくれました。

山木屋地区で開催されたペーニャの様子（2018 年）

様々な垣根を超えた地域交流会

ペーニャ（PEÑA）

世代や地域といった垣根を超え、一人ひとりが主役になって創り上げる地域交流会「ペーニャ」。毎年お盆の時期に山木屋地区で昭和要素と中南米の食文化を取り入れ、どこか懐かしさを感じ、集まった様々な人が新しい交流を生むことを目的に開催しています。